

〈生活〉

気付きの質を高める生活科の授業づくり

——思いや願いを実現していく学習過程の積み重ねを通して（第1学年）——

名護市立名護小学校教諭 島川千佳

I テーマ設定の理由

平成元年に新設された生活科は、幼児期の育ちと小学校教育の学びをつなぐ中心となる教科である。また、中学年以降の理科や社会、総合的な学習の時間へつながっていく結節点となっており、教育全体の充実を図る上で重要な役割を担っている。生活科は、児童の生活圏を学習対象の場とし、直接関わる活動や体験を通して様々な気付きを得て、自立への基礎を養うことをねらいとする教科である。創設以来大切にされてきた「気付き」については、改訂の度に何度も学習指導の在り方が問われてきた。今回の改訂においても『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』（以下『解説生活編』）に「具体的な活動や体験を通して気付いたことを基に考え、気付きを確かなものとしたり、新たな気付きを得たりする」ように指導の改善・充実すべき点が示され、今まで以上に、気付きの質を高める意図的・計画的・組織的な生活科の授業づくりが求められている。

これまでの自身の生活科の実践において、児童が興味・関心のある身近な題材を扱い、活動や体験の楽しさを味わわせたり、絵作文や「みつけたよカード」にかいたり、発表したりするなどの取り組みを行ってきた。しかし、絵や文に表れた気付きを拾い、着目させ、新たな気付きが生まれる場を設定することや気付きの質を高めるための教師の働きかけなどが十分ではなかった。また、活動をスタートする際に、教師が児童の思いや願いを十分に受け止めることができず、準備しすぎたり、安易に手を貸してしまったりした結果、問題を解決するために試行錯誤する場面が少なくなり、児童自身の力で「やればできた」と、達成感や成就感を味わわせるには至らなかった。そのため、学習活動が体験だけに留まり、児童が夢中になって活動する中で新しい発見をしたり、成功を実感したりすることには至らず、得られた気付きを質的に高める授業づくりが十分ではなかったといえる。

気付きの質を高めるためには、児童の側に立ち、児童にとって価値のあるものに寄り添い、こだわりをもって試行錯誤させながら、繰り返し関わるができるような場と時間が必要である。直接関わる活動を通して得た気付きから、新たな活動へと発展し、それを繰り返すことで気付きの質が高まり、さらに自分自身への気付きも高まっていく。それは、生活科が求める究極的な児童の姿である。

そこで本研究では、主たる内容「(5) 季節の変化と生活」とのつながりをもたせた「(6) 自然や物を使った遊び」とし、従たる内容として「(8) 生活や出来事の伝え合い」を組み合わせた「あきとなかよし」の単元において、児童の思いや願いを出発点に、学習対象に繰り返し関わるができる学習過程を3回設定する。一回目の活動や体験での気付きが、次の活動の動機や目的となり、そこからまた新しい活動を生み出していくことで、気付きの質が高まると考える。児童の思いや願いから広がる連続的で発展的な学習過程を積み重ねる環境を整え、児童の活動をより深くしていく。このような児童の思いや願いを実現していく学習過程の積み重ねを通して、気付きの質が高まると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

「あきとなかよし」の単元において、児童一人一人の思いや願いを実現していく学習過程を積み重ねることで、気付きの質が高まることができよう。

II 研究内容

1 気付きの質を高めることについて

(1) 生活科における気付き

『解説生活編』では、気付きについて「対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動によって生まれるものである。そこには知的な側面だけでなく、情意的な側面も含まれる。また、気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。」と示されている。気付きは、活動や体験を通して思考する中で「あれっ」「なるほど」のように心の動きを伴って生まれるものであり、次の活動への動機となる。また、井深智子（2018）は「気付きは、低学年児童の発達特性から設定されてきた生活科独自の資質・能力の一つ」と述べており、活動や体験を通して得た気付きは、確かな認識につながるものとして重要な役割を担っている。

(2) 気付きの質を高めるとは

『解説生活編』において「気付きの質が高まった」ということを「無自覚だった気付きが自覚されたり、一人一人に生まれた個別の気付きが関連付けられたり、対象のみならず自分自身についての気付きが生まれたりすること」と示されている。また、朝倉淳（2020）は「ある気付きと別の気付きの共通点や相違点、相関関係や因果関係が確認されたときに気付きの質が高まる」と述べている。さらに、井深は、気付きが「分類され関連付けられたり、既存の経験などと組み合わせられたりすることで気付きの質が高まる」と記している。そして『解説生活編』では、自分自身への気付きとして「集団における自分の存在」、「自分のよさや得意としていること」、「自分自身の成長」に気付くことが重視されている。低学年の児童の気付きは、情緒的で断片的という特徴をもち、気付いたことを自覚していない場合もあるが、活動や体験したことを話したり、書いたりすることで、無自覚だった気付きは自覚されていく。また、気付いたことを基に考えることで気付きが関連付けられ、活動を振り返ったりまとめたりすることで視点を変えて自分自身への気付きとなると考える。

以上のことより、本研究では、気付きの質が高まったということを「自覚された気付き、関連付けられた気付き、自分自身への気付き」と捉え、それらの姿を見取っていく（表1）。

表1 気付きの質が高まったということ

⑦自覚された気付き	・無自覚だった気付きが自覚されること
⑧関連付けられた気付き	・個別の気付きの共通点や相違点が明らかにされたり、分類及び関連付けられたり、既存の経験などと組み合わせられたりすること
⑨自分自身への気付き	・集団における自分の存在に気付くこと ・自分のよさや得意としていることに気付くこと ・自分自身の変容や成長に気付くこと

2 自分の思いや願いを実現していく学習過程を積み重ねることについて

(1) 思いや願いを実現していくこと

『解説生活編』には、「生活科の学習を支えているものは、児童が対象と出会い、学習を進める中で生まれてくる対象への思いや願いである。」「児童が好奇心や探究心、対象への親しみ、憧れなどからくる『やってみたい』『知りたい』『できるようになりたい』といった自分の強い思いや願いをもつことができれば、単元を通して主体的で意欲的に学ぶことが可能になる」とも示されている。活動や体験が教師の指示からではなく、児童の思いや願いから始まることで、活動への意欲が芽生え、その実現のために工夫したり、思考を働かせたりしながら、活動が深まっていくと考える。

(2) 生活科の学習過程について

『解説生活編』に示された基本的な生活科の学習過程を表2に表した。朝倉（2018）は、「生活科の学習過程は思いや願いを実現する過程である。（中略）そこには自ずと思考、判断、表現、具体的な活動や体験が存在する」と述べている。『啓林館指導書総説』（2020）では、学習過程は①～④が順序良く繰り返されるものではなく、順序が入れ替わったり、一つの活動の中に複数の学習過程が一体化して同時に行われたりすることもあると記されている。思いや願いを実現しようとするには、活動や体験の中で自ら考え行動し、感じたことや考えたことを表現したり交流したりすることが大切だと考える。本研究では、体験活動と表現活動とが豊かに行きつ戻りつする相互作用を意識し、思いや願いが実現に向かう4つの学習過

表2 生活科の学習過程

- | |
|------------|
| ①思いや願いをもつ |
| ②活動や体験をする |
| ③感じる・考える |
| ④表現する・交流する |

程を一つのサイクルと捉え、研究を進める。

(3) 学習過程の積み重ねについて

長谷川悦子（2018）は「繰り返しを取り入れた単元構成」の必要性を指摘している。活動を複数回設定することにより期待できる効果として、「2回目の活動では、主体的な学びをより自立的に進めることが可能となること」や「気づきが関連付いたり、その意味や価値まで考えられたりする」ことが述べられている。児童の思いや願いを実現するためには、対象と十分にに関わることでできる場と時間の保障が必要である。繰り返すことで、一度では気付かなかったことに気付いたり、1回目の経験をもとに、2回目、3回目は対象に自ら働きかけたりすることができる。また、繰り返し関わる中で以前の自分と比べ、自分自身の成長に気付くこともできるようになると考える。本研究では、活動の繰り返しを「児童一人一人の思いや願いを実現していく学習過程の積み重ね」と捉え、主体的・能動的に活動する中で気づきの質が高まるようにする（図1）。

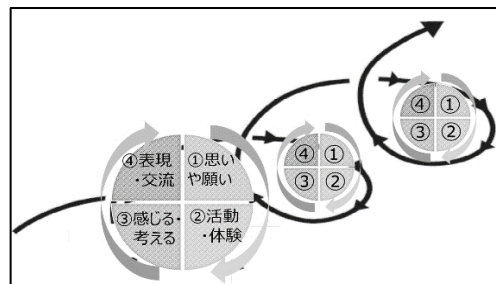


図1 思いや願いを実現していく学習過程の積み重ね
（啓林館指導書総説を基に作成）

本単元では、学習過程を3回積み重ねる（図2）。活動①「見付けた秋で遊ぼう」では、児童一人一人の思いや願いに沿うよう、遊びやつくるものを限定せず、幼児期の経験を生かしたり、本や図鑑などで調べたりして遊ぶ。活動①で遊びに浸った後、「もっといいものをつくりたい」と新たに取り組みたいことが生まれることを想定し、活動②を仕組んでいく。そして、「こんなにいいものができたんだから、誰かに伝えたい」という思いや願いの高まりを見据え、活動③を構想する。このように、児童の思いや願いが実現できるよう学習過程を積み重ねることで、活動の深まりとともに、気づきの質も高まっていくと考える。

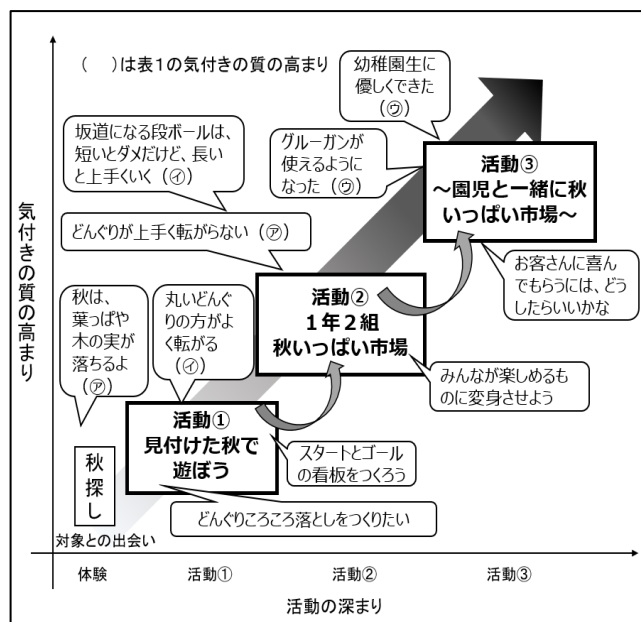


図2 「秋と仲良し」における学習過程の積み重ね

3 気づきの質を高めるために

(1) 「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」六つの学習活動

『解説生活編』では、「気付いたことを基に考えるようにするために、見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫するなど多様な学習活動を行うようにすること」と示されている。また、「見付ける、比べる、たとえるなどの学習活動により、分析的に考えること（中略）試す、見通す、工夫するなどの学習活動により、創造的に考えること」で、より質の高い気づきを生み出すことにつながると考え、本研究では六つの学習活動を重視していく（図3）。

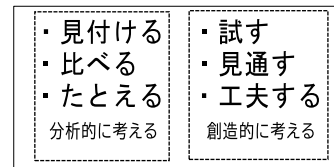


図3 六つの学習活動

「見付ける、比べる、たとえる」活動として、例えば、秋探しに出かけ様々な落ち葉を見付ける活動がある。見付けた落ち葉を自分のものと友達のものとは比べ、仲間分けしながら、「秋は、きれいな色がいっぱい」と落ち葉の色が違うことに気付いていく。また、一つ一つの葉をよく見つめ「楓（フウ）の葉は星みたい」と知っている知識にたとえたり、図鑑などで名前や特徴を調べようと活動が発展したりすることも考えられる。次に、「試す、見通す、工夫する」活動例として、見付けたどんぐりでこまをつくらせて遊ぶ活動がある。友達と互いにこまを回し合い、

どちらがよく回るか競い合うことで、友達のこまを真剣に見つめ、自分のこまとの違いを見つけ出し、改良しようと試行錯誤していく。「つまようじは真っすぐ刺した方が良い」「このどんぐりは丸いから、きっとよく回る」「親指と人差し指で回すんだよ」と気付きを伝え合う中で、どんぐりの種類や形、軸の長さや位置、回し方などを工夫することが考えられる。さらには、結果を予測したり、先を見通したりしながら、多様な学習活動へと発展することが期待できる。

このように、「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」活動をしながら、気付きを比較・分類し、関連付けながら分析的に考えたり、創造的に考えたりすることでより質の高い気付きを生み出すことにつながると考える。

(2) 学習シートの工夫

気付きの質を高めるためには、気付いたことを伝えたり、交流したり、振り返って捉え直したりして表現することが大切である。表現することにより、気付きの質が高まり、対象が意味付けられたり価値付けられたりすると考えられる。中野真志（2020）は、「児童が熱中し没頭した活動における気付きは表現への意欲となり、活発な表現活動につながる」と述べている。

そこで、本研究では六つの学習活動と連動させたタイトルの学習シートを4種類使用する（図4）。「発見」シートは「見付ける、比べる、たとえる」活動と連動している。「工夫したよ」シートは、遊びの中で「試す、工夫する」ことで得た気付きが書けるようにする。「次はこうしたい」シートは、次時を「見通す」視点をもたせ、タイトルに沿い、絵と文で表現する。また、自分でタイトルを決めることのできるシートも用意することで児童が柔軟に表現できるようにする。このように、活動や体験したことを表現することで、活動によって得た気付きが確かな認識につながると考える。

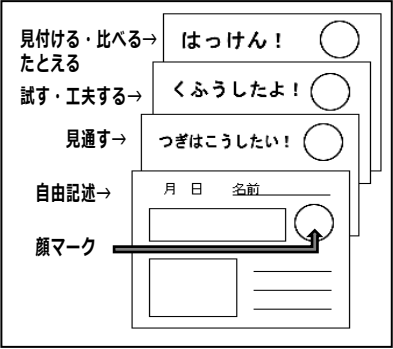


図4 六つの学習活動と連動した学習シート

さらに、学習シートのタイトルの横に顔マークを記入する欄を設け、本時の学習を振り返って自己評価できるようにする。そうすることで、教師は知的な側面の気付きだけでなく、情緒的な側面の気付きも見取ることができ、児童一人一人の変容を理解することにつながると考える。活動が停滞している児童には、声をかけて対話することで児童の思いや願いを受け止め、新たな活動への道筋をともに考えることも可能となる。このように、教師は、表現されていることの背景を理解し、尋ねかけたり、共感したりしながら児童の姿を見取り、指導に生かしていくことが大切である。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 「あきとなかよし」 ～あきのたからものであそぼう～

2 単元目標

秋の自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動やそれを伝え合う活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくったり、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしたりすることができるようにする。

3 単元の評価規準

単元 の評価 規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	秋の自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動やそれを伝え合う活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。	秋の自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動やそれを伝え合う活動を通して、遊びや遊びに使うものを工夫してつくっている。	秋の自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動やそれを伝え合う活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。
小 単 元 に お け る 評 価 規 準	① 身近な自然や物は、いろいろな遊びに利用できるように気付いている。 ② 遊びの楽しさや遊びを工夫したり創り出したりする面白さに気付いている。	① 比べたり、試したり、見立てたりしながら遊びを楽しんでいる。 ② 遊びを工夫したり、友達と楽しく遊んだりしたことを振り返り、表現している。	① みんなで楽しく遊びたいという願いをもち、粘り強く遊びを創り出そうとしている。 ② 友達のよさを取り入れたり自分との違いを生かしたりして、遊びを楽しそうとしている。

4 単元の指導と評価の計画（全 15 時間）

活動	小單元	時	学習過程	学習活動	予想される気付き	評価規準	評価方法
見付けた秋であそぼう（前半）（7 時間）済 （秋はどんな季節かな、秋探し、見付けた秋の紹介、秋の自然でお洋服づくり、お洋服を着けてパレードへ）							
活動①	見付けた秋で遊ぼう（後半）	1	①思い・願い	集めてきた秋を使った作品やおもちゃづくりのイメージをもち、つくりたいものを決める。	自然の面白さ・不思議さ 工作への興味・関心	知①	発言 つぶやき 行動観察 学習シート
		2	①思い・願い	材料や道具、つくり方を調べ、つくる計画を立てる。	つくりたいもの・材料・つくり方・道具・アイディア	態①	
		3・4	②活動・体験 ③感じる・考える	つくりたいものをつくったり、自然物や活動について表現したりする。	材料の違い・色・形・大きさ・動き方・遊び方・遊びのルール	思①	
		5	④表現・交流 ①思い・願い	作ったものを紹介する。絵本「おちばいちば」の読み聞かせを聞き、類似したおもちゃのお店屋さんをつくる。	多様なアイディア・友達と関わって遊ぶ楽しさ・達成感・喜び・更なる意欲		
活動②	一年二組秋いっぱい市場	6・7	②活動・体験 ③感じる・考える	お店の友達と相談しながらおもちゃなどを改良する。	多様なアイディア・改良へ向けて遊びを創り出す面白さ	知②	発言 つぶやき 行動観察 学習シート
		8	②活動・体験 ④表現・交流	「お試し秋いっぱい市場」をし、気付きを共有する。	遊び方の工夫・楽しませるための課題の発見・更なる意欲	思②	
		9	①思い・願い ②活動・体験	「お試し秋いっぱい市場」で気付いたことを基に必要なものを準備する。	グループの課題の解決策・相手意識をもった準備	態②	
		10 11	②活動・体験 ④表現・交流 ①思い・願い	クラスのお友達と「秋いっぱい市場」をする。 活動を振り返り、誰かを招待したいという思いをもつ。	友達との関わって遊ぶ楽しさ・達成感・喜び・更なる意欲・自分自身の成長		
活動③	園児と一緒に秋いっぱい市場	12	②活動・体験	園児が楽しめるように、みんなで協力して準備をする。	思いやり・楽しませるための工夫・多様なアイディア・遊びのルールの変更・更なる意欲	知②	発言 つぶやき 行動観察 学習シート
		13	③感じる・考える ①思い・願い ②活動・体験	「園児と一緒に秋いっぱい市場」のリハーサルをする。		思②	
		14	④表現・交流	「園児と一緒に秋いっぱい市場」をする。	園児と関わって遊ぶ楽しさ・達成感・喜び・自分自身の成長	態②	
		15		活動を振り返り、学習のまとめをする。			

5 本時の指導（3・4／15 時間）

（1）ねらい

木の実や木の葉などの秋の自然物を活用して遊ぶものや飾るもの、生活に役立つものなどを工夫して作ったり、自然物の形状から様々な発見をしたりして秋を楽しむことができる。

（2）展開

過程	・学習活動 T: 教師の発言 C: 児童の発言 () は表 1 の気付きの質の高まり	活動の様子・留意点
思い・願い	1. 前時までの活動を振り返り、本時のめあてを確認する。 あきのしぜんで「じぶんのたからもの」をつくろう。	・材料・道具・ヒント コーナーを設定する。 
体験・活動	2. つくりたいものをつくったり、自然物についていろいろ発見したりする。 C⑦: 何回やっても、壊れる。できない。(⑦) C⑧: 何、つくってるの? C⑨: どんぐりの髪どめをつくってるんだよ。でも、とめにどんぐりがくっつかない。 C⑩: グルーガンでやってみたら? 熱いから、気をつけてね。そっと出すんだよ。 C⑪: よーし、これでつくれる! C⑫: でも、やっぱり、すぐとれちゃう。上手くいかない。 C⑬: このどんぐりが大きいからじゃない? C⑭: 見て。できたよ。最初は大きいどんぐりでやったらできなかったけど、小さいどんぐりでやったらできたよ。(④)	
感じる・考える	3. 活動を通して感じたり、考えたりしたことを交流し、後半の活動について見通しをもつ。 4. もう一度つくり直し、つくったおもちゃで遊ぶ。 5. 後片付けをする。	・作戦タイムを設け、 六つの学習活動の視点を基に、情報交換ができるようにする。 【六つの学習活動】 ・見付ける ・比べる ・たとえる ・試す ・見通す ・工夫する
表現・交流	6. 「発見」「工夫したよ」「次はこうしたい」「自由記述」の学習シートを選び、 絵や文、顔マークを用いて、活動の振り返りをする。 7. 発表する。 C⑯: 今日は、にぎやか迷路でスタートの橋のところは、木のみが落ちるから工夫して壁をつくり ました。上手くいったので、嬉しかったです。(④) C⑰: 大成功! つくりたいものと違ってたけど、成功して嬉しかったよ。 お家でもできたらいいなあ。また、やりたい。 T: つくりたいものの材料がなかったから、まっぼつくりやすきなど、秋のものを使って、別の 気に入るものができたんだね。(④) T: ○○さんは、また、やりたいそうです。みんなは、まだやりたいですか? C: やりたい。やる気めちやめちやある。まだ、つくりたい。みんなでつくったもので遊びたい。	
表現・交流		
思い・願い		

学習シートをかく様子

IV 仮説の検証

研究仮説に基づき、思いや願いを実現していく学習過程を積み重ねた生活科の授業づくりが気付きの質を高めることに有効であったかについて、行動観察、発話記録、学習シートの記述、検証授業前後のアンケート調査、検証後のインタビューを基に検証する。

1 思いや願いを実現していく学習過程を積み重ねた効果について

本研究では、生活科の学習過程「①思いや願いをもつ、②活動や体験をする、③感じる・考える、④表現する・交流する」を一つのサイクルにした活動を3回実施した。活動①では、自分の思いや願いをもってつくりたいものを製作して遊び、活動②「1年2組秋いっぱい市場」、活動③「園児と一緒に秋いっぱい市場」という単元構成にすることで、一度目の活動での気付きが次の活動への動機や目的となり、主体的に次の活動を生み出していくことができるようにした(図5)。

第1時では、秋探しで見付けたどんぐりやまつぼっくりなどの自然物でつくった教師の

宝物を紹介することで、児童の「秋で遊びたい」という思いを引き出していった。これまでの経験や図鑑からつくりたいものを決めて、第2時、一人一台のタブレット端末に送った図鑑の静止画より、つくり方を調べて製作に取り掛かった。児童が考えた製作物は図6の通りである。製作活動の中で、こま回しや弓矢などの遊びが起こり、遊びの広がりを通して児童同士の関わりが深まっていった。活動の振り返りで「遊びのどこが楽しかったのか、どんな工夫が面白かったのか」について話し合うことで「皆のつくったものでもっと遊びたい」という思いや願いが高まっていった。

第5時、「おちばいちば」という絵本をヒントに、自分達で「秋いっぱい市場」という名前をつけ、似たようなおもちゃを製作した児童同士でお店屋さんを開くことになった。「みんなで秋いっぱい市場を楽しみたい」というクラス共通の願いとなり、活動②への意欲となった。その後は「つくった宝物を皆が楽しめるものに変身させよう」と遊びを改良する中で、遊びを組み合わせる、友達の工夫を取り入れるという気付きが生まれ、気付きを伝え合うことでよりよいものが生まれることを実感していった。活動②を終えた際には「2年生のおもちゃランドに呼んでもらったように、ぼくたちも幼稚園生を呼びたい」という新たな思いや願いが児童から出てきた。その後は、活動③に向けて、おもちゃランドで2年生に招かれた経験を生かして「招待状を書こう」「プレゼントをもっとつくろう」と、主体的な活動が最後まで展開された。

以上のことから、思いや願いを出発点に生活科の学習過程を3回積み重ねたことは、「もっとこうしよう」という気付きが次の活動の動機や目的となり、主体的な学びをより自立的に進めることができ、気付きの質を高めることに有効であったといえる。

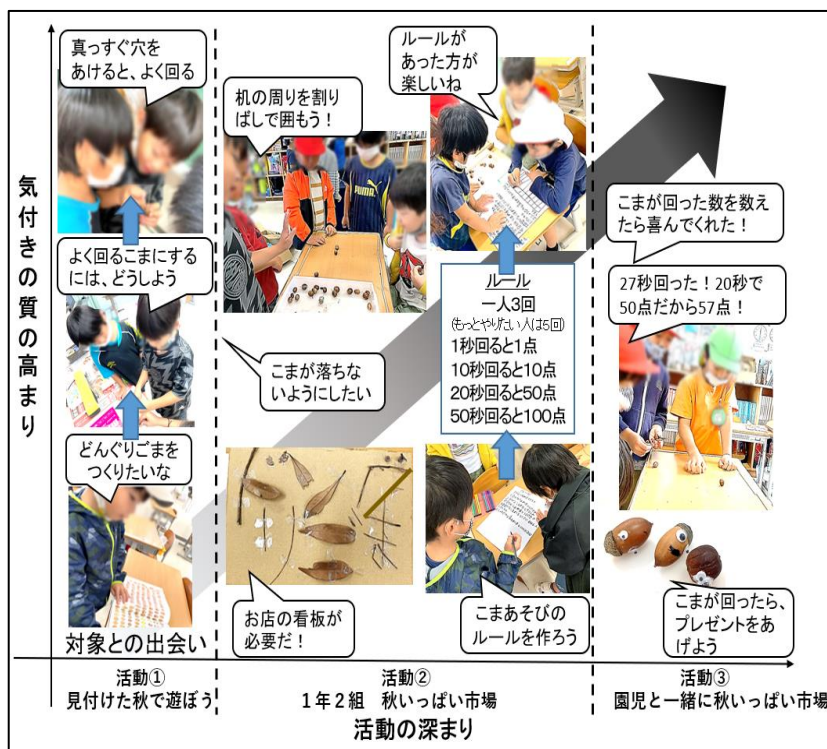


図5 思いや願いを実現していく学習過程の積み重ねの様子

- ・まつぼっくりけん玉
- ・木の実のアクセサリ
- ・木の実めいろ
- ・木の実モビール
- ・どんぐりころころ落とし
- ・楽器(ギロ・ドラム・マラカス)
- ・木の実ワールド(りす、かめ、はりねずみなど)
- ・弓矢
- ・釣り
- ・どんぐりごま

図6 児童の製作物

2 「見付ける, 比べる, たとえる, 試す, 見通す, 工夫する」六つの学習活動の効果について

六つの学習活動を通して、気付きの質を高めることができたか、行動観察、発話記録及びアンケートより検証する。

第3・4時では、秋の自然物を使って製作活動をした。「どんぐりころころ落とし」を製作していた児童は、箱の壁面に、左右交互斜めに段ボールをくっつけ、どんぐりが転がる坂道をつくっていた（図7左）。「どんぐりが上手く転がらない」という問題に対して、対象をよく見つめることで、どんぐりが次の斜めの段ボールまで転がるようにすればいいことを見付け、工夫していった。左右交互の段ボールの距離、段ボールの長さや幅など、条件を変えて何度も繰り返し製作する中で、上手くどんぐりが転がる仕組みに気付いていった。その後、どんぐりの転がり方を見通すことができるようになり「どんぐりころころ落とし」を完成させることができた（図7右）。

第8時の「お試し秋いっぱい市場」では、お店屋さんとお客さんを前後半で交代して遊ぶ活動を取り入れた。すると「お客さんが来ない」「ルールの説明を書いた方がよい」

「もっとこうしたい」などの気付きがいくつも生まれた。これらの気付きを受け「どんぐりごま」のお店では「10秒回ると10点、20秒回ると50点」と、こまが回ったタイムを数えて点数化するというルールが考案され（図8）、机からこまが落ちないように机の周りを割り箸で囲う工夫も取り入れられた（図9）。第14時には、園児が回したこまを数えて「27秒回った。20秒で50点だから、57点」と、ルールに沿って遊びを楽しむ姿が見られた。児童の学習シートには「こまが回った数を数えたら喜んでた」と記述され、ルールを工夫したよさを実感していた。「楽しく遊んでもらうにはどうしたらよいか」と願い、友達の遊びを真似たり、遊び場を工夫したりするなど「見付ける, 比べる, たとえる, 試す, 見通す, 工夫する」ことで、課題を解決することにつながったと考える（図10）。

単元終了後のアンケートでは、「生活科の学習で試したり、工夫したりしている」の項目は「当てはまる」と回答した児童は、検証前と比べて46.2ポイント増加した（図11）。これより、児童が問題を解決するために、試行錯誤していたことがわかる。「最初はできなかったけど、工夫したらできたよ」という児童の言葉から、思いや願いが実現した達成感や成就感を味わい、遊びを創り出す面白さを感じていたと推察できる。このように、「見付ける, 比べる, たとえる, 試す, 見通す, 工夫する」六つの学習活動を通して気付いたことを伝え合うことで、一人一人の気付きが共有され、みんなで気付きの質を高めていくことができたといえる。

3 学習シートの効果について

本実践で使用した学習シートは、六つの学習活動と連動させ「発見」「工夫したよ」「次はこうしたい」「自由記述」の4色に色分けした。児童が選択した学習シート数を表3に示す。第3・4時では、製作活動から得た発見や工夫を



図7 製作物「どんぐりころころ落とし」



図8 ルールの工夫

図9 こまが落ちない工夫

気付き・思いや願い	解決策
・お客さんが来ない	→ 宣伝する、看板をつくる
・道具が足りない	→ 遊び道具を増やす
・おもちゃが壊れる	→ 修理コーナーをつくる
・楽しく遊ばせたい	→ ルールの工夫、つくり方やコツを紙にかく
・お客を喜ばせたい	→ 景品をつくる

図10 六つの学習活動より考えた解決策

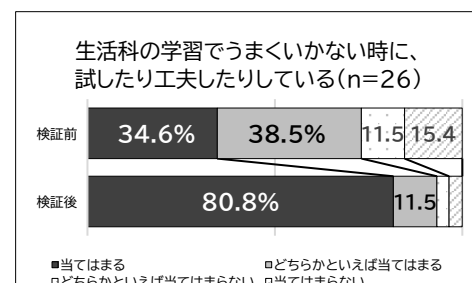


図11 生活科の学習で試したり工夫したりしている

表3 学習シート数の比較 (n=26)

	発見	工夫したよ	次はこうしたい	自由記述
六つの学習活動	見付ける 比べる たとえる	試す 工夫する	見通す	
第3・4時	6名	8名	3名	8名
第8時	3名	1名	8名	13名
第11時	5名	1名	10名	9名
第15時	0名	4名	7名	15名

記述している児童が多いことがわかる。その後、第8時では、「お試し秋いっぱい市場」で得た気付きが多く見られ、自由記述には失敗録も複数見られた。学習シートには、教師からの賞賛や助言を書き入れ、振り返らせることで、活動の改善や発展を促した。第11時では「幼稚園生と一緒に遊ぶ」という新たな目的が加わったため「次はこうしたい」シートが多くかかれ、幼稚園生を楽しませるために工夫したいことなど、次の活動を見通した記述が見られた。そして、第15時では、自由記述を選ぶ児童が過半数となり「嬉しかった」

「大成功」などのタイトルが目立った。学習シートには「けん玉を上手く教えられて嬉しかった。園児のけん玉が上手くいったからもっと嬉しかった」と表現されていた(図12)。他にも多くの児童が園児と関わった喜び、満足感や手応えなどを自由記述のシートに表現しており、伝えたい思いが膨らんだものと考えられる。これは、中野が述べる「児童が熱中し没頭した活動における気付きは表現への意欲となり、活発な表現活動につながる」ことだといえる。表4に、六つの学習活動と関わる児童の思考を整理した。学習活動と連動したタイトルが、児童に振り返る視点を与え、思考することの助けになっていたことがわかった。気付いたことを表現し、振り返って捉え直すことで、気付きは質的に高まっていったと考える。

また、児童が学習シートに記入した顔マークを表にして可視化し、一人一人の学習状況を把握した(図13)。「上手くいってない」マークの児童には、活動後に「何が上手くいってないの」と尋ねかけ、上手くいっている児童とつなげたり、ともに新たな方法を考えたりすることで、児童が自身で活動を進めていけるようにした。単元の終わりには「上手くいった」と表現する児童数が最大となり、一人一人の思いや願いが実現したことがうかがえる。このように、学習シートに本時の学習を振り返る顔マークを表現させたことで、教師は、児童一人一人の日々の変化に目を止め、思いや願いに寄り添うことができ有効であったといえる。

4 気付きの質の高まりの考察

行動観察、発話記録、児童の学習シートの記述から、表1に示した気付きの質の高まった姿を考察する。

(1) 自覚された気付きについて

児童Aは、まっぼっくりけん玉で遊ぶ中で得た気付きを「発見したよ」と伝えに来了。「何を発見したの」と尋ねると「けん玉は、ひざを曲げるとよく入るよ」とけん玉が上手く入る方法を体の動きと合わせて実演し、児童Aの気付きとして自覚されていった。その後、発見したことを紙に書いてお店に貼り「けん玉のコツを伝えたい」という願いをもって、第10時を迎えた。実際に来てくれたお客さんに児童Aは「ヒントだよ」と気付きを紹介していた。「ひざを曲げたら一発で入った」と喜ぶ友達が、また別の友達に伝え、クラスの気付きへと広がった。学習シートには「大成功! 発見! の紙が書けて嬉しかったよ。」と記され、自身の気付きが皆に伝わった喜びが表現されていた(図14)。

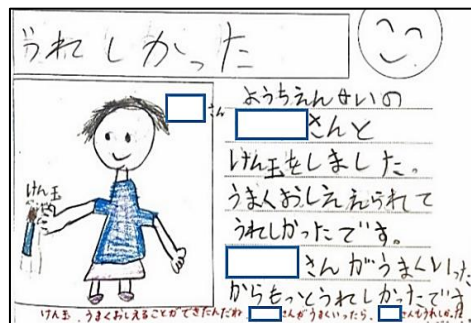


図12 自由記述の学習シート(第15時)

表4 六つの学習活動と関わる児童の思考

シートの タイトル	学習シートの記述より ※()は六つの学習活動
発見!	・短いとだめだけど、長く切ると上手くいくことを発見!(見付ける・比べる) ・まっぼっくりとビーズでツリーみたい(たとえる)
工夫 したよ!	・最初、大きいどんぐりでやったらできなかったけど小さいどんぐりでやったらできたよ。(試す) ・スタートから木の葉が落ちるから工夫して壁を作りました。(工夫する)
次はこう したい!	・次は中の段ボールをもっと上手に直したい。 ・幼稚園生を楽しませたい(見通す)
自由記述	・お客さんにつくり方を教えることができて嬉しかった。

図13 一人一人の学習状況

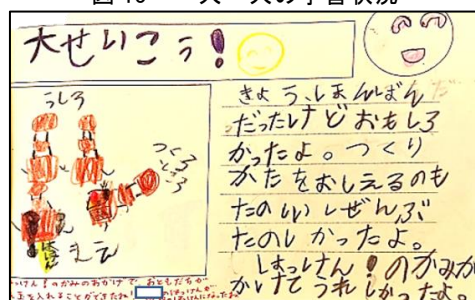


図14 児童Aの学習シート(第11時)

(2) 関連付けられた気づきについて

第3・4時、児童BとCは釣りづくりに没頭していた。木の枝の釣り竿にひもを結び、ひもにモールを結んでフックをつくっていた。モールのフックでは上手くいかない二人に「ワイヤーはどうか」と強度のある材料を提案した。二人は、釣りの経験を生かし「フックは柔らかいモールより固いワイヤーでつくった方がいい」「フックは丸めた方が釣りやすい」と対話しながら、釣り竿を完成させていった。魚に見立てたまつぼっくりも「開いている方がモールをつけやすい」とこだわって選び、試行錯誤を繰り返していた。活動の中で、用具や材料を比較し、「固い」「柔らかい」「開いている」「閉じている」などの違いに気づき、より自分たちの遊びに適したものを選択していった。その後も「海が作りたいから水色の折り紙がほしい」「折り紙をぐじゃぐじゃにしたら海みたい」など、様々な気づきが生まれていった。しかし、第8時で、釣り竿が足りないという問題が生じた。児童Bの顔マークは涙顔になっており、お客さんを十分に楽しませることができなかった気持ち、準備不足だった気づきとその解決のための方法が読み取れる(図15)。その後、釣り竿にする枝がなかったため、ススキで代用する知恵を出し、活動していた。「折り紙に魚が隠れて釣りにくい」というお客さんの声から「魚が隠れないようにするには」と思考を働かせ、水色のビニールの上に魚を配置する工夫が取り入れられた。「釣り」という遊びから、遊びに使う物を工夫し、考えを巡らせる中で、様々な気づきが関連付けられながら高まっていった(表5)。

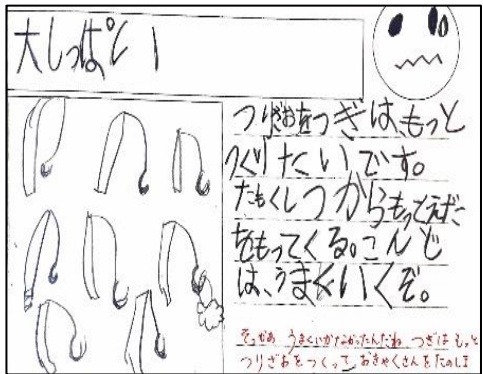


図15 児童Bの記述(第8時)

表5 児童BとCから生まれた気づき

関連付けられた気づき
・フックは、柔らかいモールより固いワイヤーでつくった方がいい。 ・フックは、丸めたほうが釣りやすい。 ・まつぼっくりは、開いている方がモールをつけやすい。 ・魚を入れる海をつくりたい。海は、水色の折り紙をぐじゃぐじゃにしてつこう。 ・釣り竿を増やそう。木の枝がないから、すすきの棒のところをガムテープで挟んでつこう。 ・魚が隠れないように、海は水色のビニールにしよう。

(3) 自分自身への気づきについて

児童Dは、終始アクセサリーづくりに励んでいた。アクセサリーの留め具になるヒートンがなかったため、ストローとどんぐりを固定し、ストローに紐を通すことでネックレスにし、問題を解決していった。上手く紐を通すことができると、次は「木の実に穴をあけたい」とキリを使うことに挑戦していった。学習シートには、「木の実に穴をあけるコツを発見したよ」と表現されている(図16左)。これは、キリが使えるようになった自分自身の技能面の成長への気づきといえる。その後、児童Dのお店は「みんなが作れるものにして、人気にしたい」と手作り体験ができるよう工夫されていった。児童Dに「上手くいかない時、あきらめずに頑張れたのはどうして」と尋ねると「〇〇さんが『こんなしたら。この方法で確かめてみよう』って言ってあきらめずにできた」と答えた。「一人でやるより楽しかった(図16中)」「一人ではできなかったけど友達が言ってくれたから(図16右)」という記述からも、支えてくれた友達との関係で、自分自身の成長に気付いていったと推察できる。

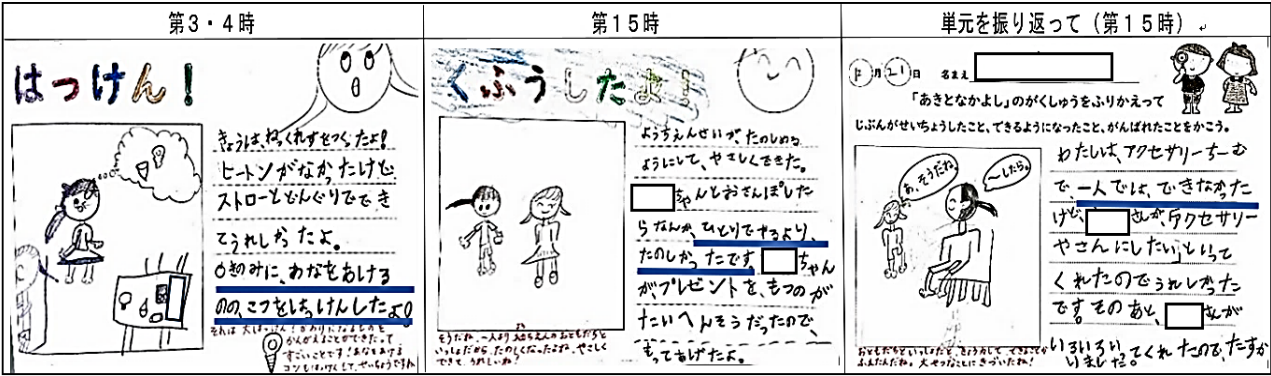


図16 児童Dの学習シートの記述の変容(下線は筆者による)

(4) まとめ

児童の学習シートの記述を気付きの質ごとに分類した（表6）。

表6 学習シートの記述に見える気付きの質の高まり（複数回答）

⑦自覚された気付き	⑧関連付けられた気付き	⑨自分自身への気付き
問題解決へ向かう ・僕のこまは少しだけしか回らない ・お客さんが少ししか来なかった。ルール の看板を書かないといけないよ ・最初は、上手くいきなかったけど…(6) 新たな思いや願いを伴う ・次は、～をつくりたい(直したい)(8) ・もっと、お客さんを増やしたい(7) ・プレゼントを作ってあげたい(9) ・幼稚園生を楽しませたい(3) ・招待状を出して喜ばせたい(2) ・冬と仲良しをしたい(7)	分析的な考え方 ・丸いどんぐりでつくるとよく回りました(形) ・つまようじをはさみで切るとよく回るよ(長さ) ・大きいどんぐりは、くっつかないから、小さい どんぐりにしたよ(大きさ) 創造的な考え方 ・どんぐりこまを逆さまにしても回った(遊び方) ・看板をつくる時立たなかったから、折り曲げた 段ボールをくっつけたら立ったよ(つくり方の工夫) ・ポンドではくっつかないから、グルーガンでつ けるとくっついたよ(道具の工夫) ・他のもので工夫したよ(材料の代用)	技能面 ・キリが使えるようになった ・グルーガンが使えるようになった(3) ・ラミネートが使えるようになった 自分のよさ ・案内ができて嬉しい(3) ・やりかたを教えられて嬉しい(2) 変容や成長 ・自分ではできなかったけど、友達と やったらできた(6) ・幼稚園生に優しくできて嬉しい(8) ・自分が成長したと思った

児童に自覚された気付きには、主に問題解決へ向かう記述や新たな思いや願いを伴う記述が多いことがわかった。「なんとかしたい」「もっとこうしたい」と自覚された気付きをきっかけに「見付ける、比べる、たとえる」活動の中で、形や長さ、大きさなどを比較し、分析的に考えながら活動していたことがわかる。「試す、見通す、工夫する」活動の中で、遊び方やつくり方、道具を工夫したり、材料を代用したりするなどして創造的に考えながら活動していたことも読み取れる。これは、気付いたことを基にして、分析的に考えたり、創造的に考えたりすることで、一つ一つの気付きが関連付けられた気付きへと質的に高まったと解釈できる。また、自分自身への気付きについては「キリやグルーガン、ラミネートが使えるようになった」という技能面の成長を実感している記述や、「自分の役目を果たすことができて嬉しい」という自分自身のよさを感じていた記述が見られた。さらに、「自分ではできなかったけど、友達とやったらできた」という記述からは、友達とつながりながら活動した中で自分自身の変容に気付いたことがうかがえる。「秋と仲良しのお勉強をして、自分が成長したと思った。幼稚園生と初めて会ったけど、ちゃんと優しくできたよ。」と自分自身の成長を表現した児童もいた。これらのことから、無自覚だった気付きが自覚され、気付き同士が関連付き、自分自身への気付きにつながったことが確認され、児童の気付きの質が高まったといえる。

以上のことから、自分の思いや願いの実現を目指して学習過程を積み重ねたことで、主体的な学びをより自立的に進めることができた。また、活動と表現のサイクルの中で気付きを振り返ったり、互いの気付きを伝え合い交流したりすることで、活動と思考が結びつき、気付きの質を高めることができた。「次は、冬と仲良しをしたい」という児童の姿は、本単元で得た気付きから、更に成長したいと次のサイクルに主体的に向かっている姿だといえる。一方で、学習過程を積み重ねる時間を十分に保障するには課題が残った。図画工作科や国語科など他教科との合科的・関連的な指導を計画する必要がある。今後の学習や2学年間を見通した生活科の指導計画を作成し、学びをつなげていくことが大切だと考える。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 児童一人一人の思いや願いが実現に向かう4つの学習過程を一つのサイクルとし、学習過程を積み重ねることで主体的な活動が展開され、気付きの質が高まった。
- (2) 「見付ける、比べる、たとえる、試す、見通す、工夫する」六つの学習活動、学習活動と連動した学習シートを活用し、一人一人の思いや願いに寄り添うことで、気付きの質が高まった。

2 課題

- (1) 生活科と各教科等との関連を積極的に図り、合科的・関連的な指導計画を作成することで、指導の効果を高める必要がある。
- (2) 見通しをもって生活科を進めるために、単元と単元の関係を意識した年間指導計画を作成し、第2学年に継続・発展していく必要がある。

〈参考文献〉

- 朝倉淳 2020 「生活科の理念を示す教科目標」 田村学編著 『新学習指導要領の展開』 明治図書
- 国立教育政策研究所 2020 『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』 東洋館出版社
- 渋谷一典 2020 「活動や体験を通して育成される生活科の資質・能力」 文部科学省教育課程課 『初等教育資料 2020 年 8 月号』 東洋館出版社
- 寺尾慎一 2020 『せいかつ 指導書総説』 新興出版社啓林館
- 朝倉淳 2018 「新しい生活科の授業実践のポイント」 朝倉淳編著 『小学校教育課程実践講座 生活』 株式会社ぎょうせい
- 井深智子 2018 『『気付き』と学習指導』 須本良夫編著 2018 『生活科で子どもは何を学ぶか』 東洋館出版社
- 長谷川悦子 2018 「学習指導要領で描く生活科の単元構成」 朝倉淳編著 『小学校教育課程実践講座 生活』 株式会社ぎょうせい
- 文部科学省 2018 『小学校学習指導要領解説 生活編』 東洋館出版社
- 中野真史 2016 「生活科における深い学び」 文部科学省教育課程課 『初等教育資料 2016 年 12 月号』 東洋館出版社

〈参考 Web サイト〉

- 三森 望美 2020 「あきだいすき～関わる機会・対象の充実による深い学びの実現～」 『啓林館』
https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/sho/seikatsu/support/jissen_arch/202004 (最終閲覧 2022 年 2 月)
- NHK for School 「おばけのがっこうたんけんだん～あきのおもちやであそぼうよ～」
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005280019_00000 (最終閲覧 2022 年 2 月)
- 岡崎誠司 2020 『『深い学び』を実現する生活科の授業構成』 『富山大学人間発達科学部紀要』
https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=18052&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1 (最終閲覧 2022 年 2 月)